

第1回習志野・八千代・船橋地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年8月21日（月） 午後2時から3時40分まで
- 2 場 所 千葉工業大学 津田沼キャンパス 5号館6階会議室
- 3 出席者 11名／15名
- 4 概 要

（1）座長の選出

座長に古賀委員を選出

（2）地域協議会設置の趣旨

地域協議会設置の趣旨について事務局より説明

【座長】

ただいまの説明について、質問や確認事項があれば是非お願いしたいがいかがか。特になければ、次の議題に移る。

（3）「県立高校改革推進プラン」及び「第1次実施プログラム」について

資料3「県立高校改革推進プラン及び第1次実施プログラムについて」に基づき、同プラン及び同プログラムの内容について事務局より説明

【座長】

事務局からの「プラン」及び「プログラム」の説明について、質問や資料の確認などあればお願いしたいがいかがか。

私から用語について確認したい。「コース」というのが特色化の中で入っている。「学科」と「コース」の違いは何かご説明していただきたい。

《事務局》

専門学科については、入学の段階でその学科を志願することになる。その学科の教育課程の中で3年間学習し、専門科目を25単位以上履修しなければならないという学習指導要領上の制限がある。

コースについては、普通科や専門学科の中に置くものであり、入学後にコースの希望を取る形になる。また、コースの専門科目は単位数などの制限はなく、実施形態も選択科目の一部とするほか、希望者のみ放課後7限での実施や週休日・長期休業中等に集中講座として実施するなど、学校の実情に応じて柔軟に編成することができる。

【座長】

コースの方が柔軟に設定でき、特色を出しやすいため、対外的なアピールもしやすいということで理解をした。他にいかがか。

【委員】

「観光に関するコース」ではどんな学びをするのか教えていただきたい。

《事務局》

観光に関するコースは県内で初めて設置するもので、令和6年度入学生が2年次からコースを選択することになるため、運用は令和7年度からになる。現在、校内で準備組織を作り計画している段階である。

基本的には商業の科目の一環として、観光ビジネスに関する学びや、おもてなしの精神を学習するようなイメージでコース設置をしたところである。また、設置を予定している一宮商業高校は、以前 SPH（スーパープロフェッショナルハイスクール）の事業に採択されたこともあり、地域との連携をうまく活用し、運用について学校が検討しているところである。

【委員】

承知した。

(4) 習志野・八千代・船橋地区の県立高校の現状と課題

資料4「習志野・八千代・船橋地区地域協議会 基礎資料」に基づき、習志野・八千代・船橋地区の県立高校の現状と課題について事務局より説明

【座長】

事務局から「習志野・八千代・船橋地区の県立高校の現状と課題」について説明していただいた。当地区は基本的に普通科が多く、専門高校が一つもないというのは非常に特徴的である。また、大学進学が増えており、割合として4分の3という説明もあった。これは全国的に言えることで、高度情報化社会や知識基盤社会では良い傾向である。ただ、モラトリアムが伸びており、周りがいくからや、社会に出たくないという理由で高校・大学を目指すという一連の流れが普通科の多いことと関係がある。そこが中継点である高等学校の難しい所でもある。

また、卒業後の進路が多様な学校においては、先生方も生徒指導を含めいろいろな苦勞をされているようである。大学においても現在は多様な学生がおり、同じ大学内でも非常に高い学力を有している学生から、基本的な学力が不足している学生まで様々であるのが現状である。

本日は、現状と今進めている方向の共有が中心になるので、ご確認いただいて質問や資料の確認などあればお願いしたいがいかがか。

(5) 質疑

【座長】

ここまで、所定の議事について進めてきたが、全体を通じて質問があれば何うがいかがか。

【委員】

先ほどコースの説明と質問があったので、コースの様子を説明させていただく。津田沼高校には音楽コースがある。また、吹奏楽部やオーケストラ部、合唱部があり、各部活で定期演奏会を行うなど、「音楽のまち」習志野市の地域の方に音楽の素晴らしさを伝えている。その評判を聞いた中学生が音楽を学びたく入学している。コースの専門科目は2年生からあり、「音楽理論」等の専門性について学び、生徒の意欲も高い。また、音楽の教員が3名おり、きめ細かい指導を行っている。進路先も東京藝術大学や千葉大学など徐々に実績を上げている。コースは学校の特色としてのアピールになっている。一方で、音楽コースを選択する生徒の数は年によって20名～40名とばらつきがあるのは事実である。

【座長】

音楽コースから音楽に関係のない進路選択もあるのか。

【委員】

音楽関係以外の進路希望にも対応できるよう教育課程を工夫しており、生徒は様々な進路選択をしている。

【座長】

特色付けの難しい点は、15歳の生徒の関心と18歳の進路選択とでズレがある。高校3年間でこんな世界があったのかと気が付くこともある。決めすぎることでがんじがらめになることもあり、難しいところである。大学でも色付けしすぎて、先の進路に行き詰ってしまうというケースもある。逆に、色付けすることでモチベーションを高く持ち、一生懸命学び、高校生活を送ることもある。

他にいかがか。

【委員】

県立高校の現状と当地区の状況を説明していただいた。習志野市においては、県立高校は津田沼高校、実籾高校ともに倍率は1倍を超えて推移している。市立高校は市立習志野高校があり、今後人口減少の中でどう存続していくかというのが、議題の1つとして上がっている。

子供の数が減少する中で、県立・市立・私立高校それぞれが子供たちの取り合いになる。県立高校はプランにおいて多様なカリキュラムを用意し、魅力ある県立高校を作っていく話だと思う。市立習志野高校も魅力的なプランを考え、子供たちに進学してもらおうと考えている。

県立高校がどうあるべきか、県立高校の数が適正なのかなどあると思うが、この協議会において、どういった視点で議論をしていったらいいのか。次回の会議で発言しやすくなるという印象があるが、いかがか。

《 事務局 》

1回目はデータも多く、資料も多岐にわたっていた。本日の意義としては、様々な立場の方が一同に会しているため、国の動きから千葉県の動き、そして各学校の詳細についてお示しした。人口減少の中で県立高校の在り方として適正規模・適正配置があり、事実として当地区においても適正規模を満たしていない学校もある。郡部では顕著であるが、学校がなくなってしまうと地域が衰退していく。ある学校がなくなってしまった場合、その地域・地区はどうなっていくのか。また、人口が減っていく中で高校の在り方について是非とも議論したい。また、普通科の高校が多い中、こんな学びが必要ではないだろうかという議論もある。今日お示した資料をもとに、次回までに疑問点があればそれをテーマに議論していきたい。テーマの立て方も様々だと思うので、それも含めてこの会議だと考えている。

【 委 員 】

承知した。

(6) その他

【 座 長 】

他になければ次に進む。その他、議事はないか。

(意見なし)

ないようなので、進行を事務局にお返しする。

第2回習志野・八千代・船橋地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年9月27日(水) 午後2時から3時40分まで
- 2 場 所 千葉工業大学 津田沼キャンパス 5号館6階会議室
- 3 出席者 10名/15名
- 4 概 要

(1) 第1回習志野・八千代・船橋地区地域協議会の記録(案)について

委員に確認し、承認

【座長】

前回、事務局から地域協議会の趣旨、プラン及びプログラムについて、そして習志野・八千代・船橋地区の県立高校の現状と課題について、説明があった。前回の説明を踏まえて、今回は具体的に協議を進めていくが、事務局から資料が出ているので、まずは資料の説明をお願いする。また、委員から、「どういった視点で議論をしていったらいいかが示されると、発言がしやすくなる」といった意見もいただいているため、事務局から議論の進め方について何か提案があれば、合わせてお願いする。

(2) 習志野・八千代・船橋地区に所在する県立高校の在り方について

「資料1 第2回地域協議会スライド資料」、「資料2 習志野・八千代・船橋地区における学科及びコース等の設置状況」に基づき、この地区における学科及びコース等の設置状況について、「参考 県立高校学校紹介リーフレット(第2学区)」に基づき、地区内の各校の取組についてそれぞれ説明するとともに、この地区の県立高校に今後必要とされる学びは何かについて事務局より論点を提示

【座長】

ただいま事務局から、議論の進め方について論点の提示があったが、いかがか。

(異議なし)

それでは、提案していただいた形で進めていく。では、一つ目の論点について、事務局から引き続き説明をお願いする。

(3) 全日制・定時制・通信制の望ましい在り方について

資料1「第2回地域協議会スライド資料」に基づき事務局より説明

【座長】

ただいま事務局から論点について、提示があった。少子化で高校生の母数は減っているが、ニーズは多様化している。コンディション、例えば言語や家庭環境、保護者対応、障害等あらゆる状況が考えられるようになった。障害については、法的な整備が進み、従来よりも包括的に捉えるようになってきている。合理的配慮の幅も増えている。そういった意味ではここ数年で考えなければいけないことが増えている。委員の皆様の経験や今の立場に即して、発言いただけたらと思う。こういう場なので、それぞれ個々の個人的な意見でもよい。

【委員】

普通高校に勤務し、今の説明を伺って頭に浮かんだことを率直に述べる。私が中学生のときは、偏差値で輪切りにしていた。ホームページもなかったため、あるのは数字だけだった。教員になり、自分の学校の様子や魅力を伝えるということが始まった。学校のことがわからないまま、入学するべきではない。過去の勤務校では、自己啓発指導重点校ということで県から指定を受け、生活指導等に力を入れた。40人のクラスだったが、卒業までに多くの生徒の転学退学があった。しかし、中学校の先生や周りからもっと厳しい指導してほしいといった意見もあった。その頃は、徹底して厳しい生徒指導で進めていた。その勤務校は、地域的なものからか、家庭環境が厳しい生徒が多かった。様々な困難に直面する生徒にそういった指導をすることで、子どもたちの安全が保障される、守られている学校づくりを進め、安心

して授業が受けられる学校になった。学び直しという言葉が先ほど出てきたが、勉強が苦手な生徒が多く、通常の教科書だと難しいので、先生方で手作りの教材を作った。授業が行われている1つのクラスに3人の先生が入り、空いている時間は教材を作って、終わったら採点してと忙しい日々だった。子どもたちに合った教材だったので、1枚課題を解いたら手を挙げて、2枚目の課題をもらって、3枚4枚と課題が評価されていくので、自分たちもやればできるんじゃないかというような自己評価が上がっていく教材であった。それが当時、全国的に評価を受けて、各地から授業見学に来ていた。人が来ると子どもたちは喜ぶ。自分たちの活動は全国的に評価されていると認識した。また、自分の気持ちが変わっていくという自覚もあった。子どもたちが学校に来て、自分たちの変化を感じ、周りに認められることで自信がついて、そして卒業していくということが学校の役目ではないか。次に勤務した園芸科がある学校では、1クラスだが、自分たちで野菜を育てて、それを売っていた。楽しそうにやっていた。頑張っている生徒たちは進路もいいところに行っていた。そんな経験がある。

【座長】

長い経験の中で、問題のある生徒の傾向というのは変わってきているのか。対応が必要な生徒の状況に変化はあったか。

【委員】

だんだんと辞めていくと言ったが、残った子たちが、ここまで来たんだから頑張ろうと言っていたことを覚えている。ルールを守ることが苦手な子たちは多かったが、そのルールや制限の中で、でも頑張っていこう、卒業しようと言っていた。社会に出て、やはり学校にあるようなルールを守るということは必要である。彼らはそれを学べたのではないかと思っている。

【座長】

高校生の様子が変わってきていることがわかる。できればまず同種のお話を伺いたい。

【委員】

具体的な子どもたちの変化や指導などの観点をもう少し広く捉えて、今の問題点として考えることで、話ができることがある。子どもたちのニーズが多様化していると、先ほど繰り返し出てきていたが、本校でも馴染めないで離脱する生徒が残念ながらいる。そういう子たちを見ると、スマホ依存で深夜まで起きていて、全日制になじむことができないということがある。社会としては、それを許容するシステム、受け皿ができてきている。例えば、もう高校だけに限らず、大学や全世界的にもオンライン化が進むことによって学び方が相当多様化している。以前は、全日制の学校に行って一人前というような基準があった。それは崩れている。私立の広域通信制高校があつという間に席卷した。そこは、最先端の技術を使って非常にユニークな面白い先生の授業をビデオ形式にして、繰り返し再生できるため、教員の展開力は必要がなく、一番強いコンテンツとなっている。例えば同じ教科でも学校では人気のある先生もいれば、そうではない先生もいる。(通信制は)その人気がある先生のコンテンツのみで勝負できる。脅威ではある。しかし、そういうものを選ぶことができるということは、普通になっている。色々な学び方がある。先ほど示された全日制・定時制・通信制という選択肢の外にもある。例えばインターナショナルスクールでは、最近企業も対応していて、とんでもないお金をかけて、そして学費も年間300万、400万とかかる学校が、国内にできてきている。長野などでは今、開校ラッシュと聞いている。世界的なトレンドとかビジネストレンドを捉えた上で、そこで良いとされているものがお金はかかるけど出てきている。プログラムとしては面白そうなことではあるが、全日制の学校が対応することは厳しい。日本のルール外の学校ができていて、そこに本当のお金持ちの方とか、本当に教育に関心がある方が無理をしてローンを組んででも行かせるというのが流れとしてある。その中で、この千葉県の地区で、公立学校がどのような学校を目指すのか。

【座長】

ICTと教育の関係性として、つながりが二極化している。1つは最初の方で言っていた、例えば不登校生徒や、かつて問題生徒と言われていたところのゾーンが、どちらが原因で結果なのかわからないが、インターネットやスマホ依存、ゲーム依存となり、SNSにつながるアンダーの話と、後半の方でおっしゃっていた金持ちとかトップの生徒が、ガラパゴス化した日本の教育を相手にしないとなっている。その両方にネットが接続してしまっている。

中学校の話も伺いたい。

【委員】

会議の冒頭からあったが、確かに不登校児童生徒が増えており、そういう子たちが家の中にこもっている中でゲーム依存やアニメが好きというケースは非常に多く見受けられる。完全に不登校だったアニメ好きの生徒が、学校行事の声優の講演会をきっかけに、少しずつ登校して別室で勉強するようになり、高校、大学と進むことができたことがあった。不登校の子供たちは、大体小学校二、三年生ぐらいでつまずいて、中学に上がってきたときには全く勉強を何年もやってない状況であることも多い。そこから学校に来ようと言っても、なかなか難しい。タッチ登校と言って学校に来て先生に会ったら教育的配慮で出席にすることもありますが、それもできない子もいる。髪の毛も切らず、すごく伸びている子もいた。そういう子たちの中には今でもひきこもりをしている子もいるし、ゲーム依存していた子の中には、全く登校できなくて、高校も入れるところに行きたいと言って入ったが、2日で辞めた子もいた。そんな指導でいいのかと思っていたが、高校に交流人事で行ったときに、やはりこれでは駄目だと再認識した。しっかりと目的意識を持つということ、高校に何をしに行くのかということを引きちんと指導した上で高校に行かせなければ駄目だということを再確認した。確かに長欠気味の子の中にはネットに依存している子も多い。外国の労働力を頼らなければいけない状況の中で、様々な国の子供たちが学校にはいる。それに対して教育が追いついていかない。外国人を受け入れられる、センター校のようなものを作っている市町村もあるが、高校にもあったら嬉しい。市では対応できないぐらい様々な国々から来ているため、言語指導が追い付かない。言葉が伝わらないから、文化の違いも教えてあげられないし、勉強どころではない。その辺りは厳しいと思う。

【座長】

高校のカラーをどのように色付けていくかというような展望に立つ必要がある。例えばアニメやゲームなどサブカルチャー方面は、今の（県内県立高校の学科やコースなどの）ラインナップにはない。サブカルチャー的な色をつけるというのは、ありではある。ただ、そういったサブカルチャーの先にある仕事は労働環境が過酷な場合があり、やりがい搾取のもとに、掃き捨てられるという構造になっている可能性も否定できない。そういった業界に、下働きで就職する子というのは、自分でその進路の判断能力はあまり持っていない。親も含めて、結局階層化のようなことの手助けをしてしまっているのではないか。ただ出口がないよりはよいなど、意見は色々ある。先ほど、委員がおっしゃったような、社会のルールの中でちゃんと生きていくためには、自分もそこに合わせていかなければいけない。あるいは、そのものを構築していくだけの力が必要だということがある。そういった理解をつけさせるという場も必要だし、ただそれだけでやるとそこにも入れない層の生徒の受け皿がなくなって、それを放置してもいいのかという懸念もある。

【委員】

県立の学校でまとめて考えることは難しい。層が広いので、全てを吸収するモデルというのはなかなか作れない。

【座長】

感覚としては、例えば色々なセクターなどがあつたら、教育コンテンツを提供して、それを貼り合わせて、各自でカスタマイズするようなこともありである。

【委員】

マグネットスクールというものがアメリカにあつて、一つの学校の建物の中に小さい学校が5校くらい入っているイメージのものがある。それぞれ色々なことに特化している学校である。その中にサブカル的なものも考えられるとよいのではないか。学校に行くことがかつて目的になっていたが、学校でやりたいことをまず作ってあげることも必要である。教育委員会で提示されているように、専門的な世界もあつていいと思うし、両方のバランスをとつてもよいのではないか。

【座長】

もう今はほとんどの人にとって高校が最後ではない。高校に3年間通わないことのリスクは共有できているが、行くことで何がプラスになるかはわかっていない。この学区が、普通科へ極端に傾いているが、そこを出発点にするといひ話にならないのではないか。できれば、地域の実情をお話いただいて、どんな方法でもいいので、こんな方法もあるかもしれないというような提案をいただければありがたい。

【委員】

計画を練り上げて、完璧なものを作ってやっていくことが実際無理な時代に入っている。なので、どんどんやってみて、撤収するところを見極めることができればよいのではないか。3年、5年もしくは10年ぐらいでやってみる。1回始めてしまうと畳めないというような形で、県立に縛りがあるのだとするならば、それは今、置いておいた方がよい。ビジネス界でも先読みできないと言われている状況で、この先10年20年30年の制度設計をするというのは、不可能ではないか。したがって、やることはどんどんやってみたらいいと思う。その上で、どこかで見極めポイントを設定しておいて、これだったら撤収するということができるとうい。学校は残すが、コースは変えるということも想定される。畳み方もある程度想定しておく。それができれば魅力的にできるのではないか。私立は、校長の判断が大きいが、県の教育委員会のような大きい組織で、様々なリーダーが絡んでくると止められない。

今、明らかに基軸メディアが紙と文字ではなくてビデオになっている。子どもたちも小学生中学生の時からスマホで作業することが多い。検索をかけるときに、大人はGoogleを使うが、子どもたちはYouTubeやTikTokで検索する。例えばそのビデオを基軸とした学びのスタイルがあつてもいいと思う。サブカルとまではいかななくてもそういったところを含んだものや、例えばもっとICTが従来の情報教育とつながつてもよい。まずは試していつて、方向転換もできるとういぐらいのバランスがあるとよい。

【座長】

今、YouTubeでも15分だと長いとなつている。世界ではTikTokの70秒で動いてる。それに慣れると50分授業が長く感じられてしまう。大学の120分間はもう拷問だと感じると思う。(コロナ禍で)2020年のイレギュラー時に、学校も分散登校などで、クローズという事態が相次いだ。一番直撃を受けたのは、特別活動などの学校行事や生徒会活動である。多くの学校で、オンライン文化祭なども行われたが、生徒自身に取り組むことが増えた。先生より生徒の方がコンピューターを扱える。生徒の想像力とプログラミング力は、各学校が努力されて、魅力的な取組をしている。

【委員】

コロナ対応については、当校はBYODで、1人1台になつて5年目であつたので問題なかつた。もう子どもたちがみんなやってくれる。子どもの方が詳しい。子どもたちの創造性や対応力の早さとか吸収力が本当に尋常ではない。そういったところで、彼らの力が発揮されていいと思うし、色々なところに今までと違う形で子どもたちが活躍できる場ができつつもあると思う。そういったものも取り込んで、従来のモデルをそのままやるのではなく、全部変えられないとは思ひが、少しずつ変えられるところは

変えたら良い。県立の場合には、足並み揃えとか、色々問題があって大変だと思うが、動かしていい範囲があると思うので、そういったところである程度裁量権を与えとか、様々なアイデアを活かせるようになれば良い。校長先生が独自でやれるような裁量権を持てると、現場としては動きやすいと思う。若い先生と一緒にやろうと言っても、許可が出ないとやる気も何もなくなってしまふ。

(4) 社会に開かれた教育課程の実現、探究・文理横断・実践的な学びの推進について

【座長】

話としては、議論の後半部分に入っている。高等学校の中身をどうするかという学びの中身の話である。はっきり区切ることではないので、このまま区切らず委員の皆様から色々なお話を伺いたい。

【委員】

保護者の立場としては、ちょうど秋の今ぐらいの時期は進路について悩む時期である。学校からは、何になりたいか、どういう目的を持ってこの進路に進みたいかと聞かれる。中学3年生でそれを明確に持っている子はなかなかいない。大人だつてこの先どうするのか、どうなっていくのかと聞かれたときに明確な答えができない中で、子どもに目的を持ってということができているのか。目的を早くから持っている子というのは、その目的に向かっていくことができると思うが、大半の子は目的を持っておらず、何になりたいかということも想像できていない状況である。自分たちが子どもの頃は、一部上場企業に行けば安泰という時代だったが、今は簡単に上場企業でも潰れる時代である。例えば、工業高校に行っていたとしたら他の分野に転職できたのかは不安に思う。先ほど話にあったように、基本からずれたときに、また戻れる方がよい。親の立場として言えば、工業科やスポーツ科に行ったら、進路に迷ったときにどうなるのかというのは思う。普通科は一般的に安心できるのではないか。2年生3年生となったときに、コースの選択として普通科でも情報系や工業系を選べるということはよい。ただ、そこでいきなりサブカルチャーのコースと言われたら、子どもはいいと言っても、親も正解がわからないので、心配にはなる。公立の普通科に行くと、安心という部分はある。

【委員】

中学校では、高校に進学するはっきりした目的を持つという将来設計まで考えられている子は非常に少ない。面接練習をした時に、高校の特色やなぜ受けるのか理由を聞くと答えられるが、将来の夢が何かは答えられないことが多い。そのときに指導する側としては、それはそれでいいと思っている。まだはっきり将来についてわからなくても、高校に行つて勉強しながら自分の夢を探すでもいい。自分は何が向いているのか、自分は何をしたいのというのを、基礎的な学力を培いながら探せばいいという話をし、面接でもそうやって答えるようアドバイスする。私が大学受験をしたときは、文教大学の初等科が全国で一番倍率が高かった。先ほど、教員基礎コースで勉強できると聞いて、こういうコースに入れたらよかったなと思った。船橋市内のある高校では、かつて生徒指導が大変な時期があったが、厳しい状況の中で立て直した。当時若かった先生が、みんなで奮起してチームワークよく指導していて、進路決定率が上がったという話を聞いた。高校のリーフレットやパンフレットを見たときに、進学率が優先されるが、その学校は他とは違って、就職が良かった。こういう生徒が欲しいという高校側の期待する生徒像が明確にあった。その学校を卒業するときの出口が見えていた。中学校でも勉強は嫌いだけど高校までの勉強はやってみたい。でもその先はさすがにもう勉強は嫌で、就職して家計を助けたい。そういった子たちには安心して勧めていた。普通科で進学ばかり求めるところを、他の学校との差別化で、その高校はこういうことに特化しようと思分されていたと思う。子どもたちも満足して自分の道を切り拓いていけた。今も大学進学ばかりで、学力を子どもが一番気にしている。結局は大学進学を意識していることが多い中、就職希望者に対する手厚い指導を売りにした高校が1校ぐらいあつても、人が集まるような気はする。自己推薦入試で、作文を書けば入れる大学もあるが、それでいいのかと思っていた。時代に合ったものとか子どものニーズに合ったものとか、何を作ればいいのかははっきり言えないが、

1つの例として話をさせてもらった。

【座長】

二つ目の論点の話は、国でも言われているキーワードである。平成30年の学習指導要領も今の高校1、2年生で実施が進んでいて、来年で完成する。高校の勉強はどちらかというと抽象的で理論的である。これは社会の中でこういう分野で使われる。三角関数って何をするときを使うか知っているかというような話がある。今の高校のカリキュラムというのは、1年生で大体その各教科の基礎をやって、2年、3年で探究をするという構造になっている。理想は各自生徒が問題意識を持ち、自分のテーマを持って、各自のペースで学びを深めていくという、生徒ベースの学びである。そうしないと、日本の場合は例えばトップ進学校から一流大学に行ったとしても、国際的に使えないと聞く。要するにそれを自分の本当の学力にできていない、受験学力で終わってしまっているから、経済界でも危機感を持っている。文理横断も文系理系という時代ではなくて、例えば、ゲームを作る側になるには、そのコンテンツに対する美術や歴史や文学などの想像力が必要である。本屋でも情報は集められるが、誰かと一緒にやればいい。高校はそういう出会いの場でもあるし、自分の適性や専門が見えてくる。こういう横断みたいなものは、高校も中学校も教科別に先生がいて、そこを飛び越えるのはなかなか難しいので、複数のクラスを合体させてセッションをしてみる。例えば今、総合的な探究の時間というのがあり、割と学校裁量で横断的はプログラムを作れるようになっている。理数探究というさらに新しい科目もできている。これで理系エリートを育てると国は言っているが、大学としてもそういった時間などで連携できればと考えている。難しいことを言っているようではあるが、国も今の議論と方向は似ている。何とかしたい。特に高校ならではの、その段階と特色を生かした学びを考えていきたい。

【委員】

先ほど、職業を選択しきれないという話があったが、その通りである。私達の学校でもその問題はあり、入試説明会で中学生に話しているのは、本校では職業観は問わないことにしている。キャリアデザインみたいなことを言って、すぐ何か職業をまず置いて、そこに至るまでにどうしたらいいかと前倒しして行って、今何するべきかという議論になるが、少し違和感がある。みんなが共にあってほしいのは、自分はどう生きるかであったり、何に価値を持つかであったり、どういう課題があるかである。話をするとき、実際その職業観ではなくて、自分の興味関心を中心である。でもそのときに節目節目で、自分は何がしたいのか、何が大事なのか、そういう問いと共に生きていくということが大事だと思っている。なので、決めきれないというの、もちろんある。普通科改革というのがあるが、これはどういう意味で取るか。改めて文科省が戦後、経験主義から系統主義に移行して行って、教科系統主義に移行して行って縦割りになった。そしてその縦割りになって学習して、ルールができて検定教科書ができてということが、歴史としてある。その中であって、この教科の縛りが非常に強い。先ほどおっしゃったように、この中において、特別活動として、人と人が出会って様々な経験をして、気づきがある。そういうものを失ってしまっても学校としては成り立つような教科の授業だけをやってたということがあった。改めて普通科改革というところを考えると、普通って何というところをまずちゃんと自分たちで掘り下げることが必要だと思う。この普通科のバージョン2.0じゃないが、もっと今もAIがこれだけあってChat GPTが席卷していて、便利になってきているが、個々に個性があるように、人間性みたいなのが必要だと改めて戻るのはないかという気がする。感情とか感性とか創造性とか、そういったところを考えていったときに、その時代を見据えた普通科って何なんだろうと考えたら、教育に携わる者として、その心の部分はとても大切になってくるのだと思う。子どもたちの心と向き合うことが、大切なことなんじゃないかと思う。もちろん技術には対応していく。ただ時代の変遷に対応するのではなく、啓蒙して深めていったらいいのではないか。この今回の計画というのは、ある意味第1段階であり、これまでやってきた特徴を出す必要がある。普通科をもう1回掘り下げるところで、その子ども

たちのあり方とか、人生観とか、そういったものをちゃんと向き合える時間をどう取っていくのかというところが大切なのではないか。千葉県では、森田健作知事のもとで、高等学校で道徳を入れるというのもあった。道徳とは誰かが決めた倫理規範に基づく。でも、人の世界はそれだけではない。改めて自分たちで自分たちの今のあり方ってどうなんだろうとか、ヨーロッパでは哲学という教科が入っているが、そういったところも含めて、テクノロジーと非常に人間くさい人文科学的なところの両方をうまく考えていかなければいけない。アメリカで実際サンフランシスコ近辺にできた学校が、本当に色々な観点が入っている。例えば風車のデザインを Adobe Illustrator を使って、中学校 1 年生の子たちが歯車をデザインして、誰が一番多く発電できるものを作るかということをやっている。自分たちの感覚で実際に切り出して作って、風力実験場に持って行って、実際に風を受けてどれだけ発電するかというような学びである。議論じゃなくてまず作ることが先で、みんなで作った後で、他にこういうこともあるという話ができると、すごく深い理解があり創造性が高まる。義務教育に関してはちょっとアプローチが違うなと思った。最近九州の学校などでは、ロボティクスも非常に力を入れている。高等学校普通科でしっかりとそういうのを設けることができたときに、本当の意味で普通科の新しい形が見えてくるのではないかと思う。

【 座 長 】

今のお話だと、さっき議論になったオンラインという話ともつながる。選択できる形で、オンラインで学んでも、終わった後に、改めて大学とかで人と交わっていくのかもしれないし、でもどこかで自分の心と向き合っていかなければいけないと思う。そういうときのチャンスが与えられれば良いと思う。

【 委 員 】

日本はみんな小中高大の順番に行く。専門に行ったら就職しても順番通りだが、結構海外では、一旦退学してお金を貯めて、また戻ることもある。いろんな人生の設計の仕方があって、ようやく日本でも少し多様性が出てきたというのは、生き方が変わってきたのかと思う。我々が当たり前だと思っていた順番通りに学校に進んでいって就職する者がいるのではなく、もっといろいろな形をちゃんと認めてあげるといことも親切心だと思う。社会人の先輩として苦労するから、後で勉強することはお金がかかるし大変だよと言えるが、でもそれによって子どもたちの可能性を奪っていないか。その何かやろうと思ったらチャンスとかその行動を潰してはいけないのではないかと思う。失敗してそこで終わりではない。それが糧となって、その後たくましく、骨太で生きていけるとよいが、時にその行動に吹き飛ばされるかもしれない。しかし、それこそ社会でケアするという仕組み作りの中で、ある程度対応していく必要がある。彼らを選択して何でもやらせたらいい。でも失敗したときに、次はどうしたらいいのか。そういったところで新たにまとめると。(専科ではなく様々なことに挑戦できる) 普通科っていうところもあるよという設計とか、従来の日本で作られてきた仕組みじゃなく、もう 1 回普通科とは何かというところを掘り下げられたらなと思う。

【 座 長 】

ここで欠席された委員からの意見を事務局から紹介してもらおう。

《 事務局 》

委員より意見をいただいている。県立高校を取り巻く情勢として、少子化、人口減少社会を迎え、子どもの取り合いになっている。これは避けることのできない状況で、かつ、今後 30 年以上は続く状況になると思われる。学びの多様化については、私立高校への進学について、国や県の就学援助制度により、金銭面のハードルが下がっている。また、単願、併願と、推薦での入学がしやすくなっている。これらから、一発試験の県立高校と比較して、確実に進学できる方法を選ぶ傾向にある。それと同時に通信制やフリースクールなど選択肢も増えている。大学進学率も向上し、高校の選択にあたっては、大学に進学できるかどうか重要視されるようになっている。就職するにあたっては、大卒を採用する傾向

が強い。学校運営の差については、高校の選択の条件として、校舎が新しい、設備が整っている、制服のデザインなどが関係しており、県立高校は私立高校に比べ校舎設備等で古くなっているという感が否めない。これは市立高校でも懸案となっている。また学力の格差については子どもの貧困が問題視されており、幼少期からの教育環境の格差が広がり、子どもたちの学力の格差に繋がっている。

今後の少子化、人口減少社会を踏まえると、高等学校の数、規模を縮小していくことはなかなか止めることは難しい。今顕在化していなくても近い将来には顕在化すると思われる。高校も淘汰される時代が近づいている。私立への進学ハードルが下がっている状況、学びが多様化している状況から、県立高校を取り巻く情勢はますます厳しくなり、競争が激化する。一方で、学力の格差が広がっており、公立としての役割、高等教育の受け皿としての役割はますます重要となっている。これらを踏まえ、県が示している改革プランの中で次の点に力を進めたらどうかと感じている。1点目は他の学びとの差別化を図るためのキャリア教育と職業教育の充実、専門学科やコースの拡充。2点目としては選ばれる学校となるように、教育環境の整備、特に施設設備の更新充実。3点目は、子どもたちや地域に与える影響は大きいものの、やはり丁寧かつ慎重に検討する中で、県立高校の適正規模、適正配置について考えていかなければならない。

(5) 少子化が加速する地域における高等学校教育の在り方について

資料1「第2回地域協議会スライド資料」に基づき事務局より説明

《 事務局 》

今回のテーマは、適正規模・適正配置の観点から、今後の県立高校の在り方についてとしたい。習志野・八千代・船橋地区においては、今後10年で劇的に減少が見込まれている訳ではないものの、段階的に生徒数の減少が見込まれている。現在開催中の9月定例県議会の中で、八千代市における住宅建設に伴う小中学校の教室不足の問題に関連して、地域協議会の進捗を尋ねる質問もあった。地域における高校の在り方は、所在する市町の街づくりや小中学校の将来計画にも密接に関連している。

これらのことから、各市の行政機関から選出された委員の方々には、今後の街づくり計画や地域活性化に向けた対策について、各市の教育委員会から選出された委員の方々には、それぞれの市の小中学校の将来計画について、それぞれ次回会議のはじめに簡単に説明していただきたい。各市の将来像を踏まえたうえで、今回はこの地区における県立高校の適正規模・適正配置について意見をいただきたい。

【 座 長 】

ただいま事務局から提示された3つ目の論点については、各市からの説明を踏まえて次回協議をしていただきたいという事務局からの提案だが、いかがか。

(異議なし)

それでは、各市の行政機関および教育委員会については、今回の会議の冒頭で説明をお願いします。その他、何か議題はあるか。

特に無いようなので、以上で、第2回習志野・八千代・船橋地区地域協議会の議事を終了する。

第3回習志野・八千代・船橋地区地域協議会 記録

- 1 日 時 令和5年10月12日(木) 午後2時から3時40分まで
- 2 場 所 千葉工業大学 新習志野キャンパス 12号館6階 会議室3
- 3 出席者 11名/15名
- 4 概 要

(1) 第2回習志野・八千代・船橋地区地域協議会の記録(案)について

委員に確認し、承認

【座長】

会議次第にしたがって、議事を進行する。これまでの協議会では、事務局から地区内の各県立高校の概要や取組について説明があった。まずは、事務局から資料が出ているようなので、資料の説明をお願いする。

(2) 習志野・八千代・船橋地区に所在する県立高校の状況について

「資料1 第3回地域協議会スライド資料」に基づき、習志野・八千代・船橋地区に所在する県立高校の募集学級数の推移や志願状況について説明

【事務局】

前回の協議会で示した3つの論点の3点目、「少子化が加速する地域における高等学校教育の在り方」について、意見交換をお願いする。なお、論点3については、それぞれの市における今後の街づくり計画、地域活性化に向けた対策、小中学校の将来計画について、各市から選出の委員の方々より説明をお願いする。

【座長】

ただいま事務局から説明があったことについて、各市から説明をお願いする。

(3) 習志野・八千代・船橋地区の各市における今後の街づくり計画、地域活性化に向けた対策、小中学校の将来計画について

【委員】

習志野市は、習志野市文教住宅都市憲章を掲げ、教育に力を入れている都市である。市内には市立習志野高校があり、これだけ小さい市の中でも市立高校を所有しているというような状況である。現状の街づくりということでは、習志野市においても人口減少、少子高齢化の観点で今後どうしていくかということで、計画を各事業で推進している。現状人口においては、基本横ばいで17万5000人程度を維持している。今後、鷺沼という地域にある市街化調整区域において、区画整理等の開発規模で計画人口が約6800人規模の特定土地区画整理事業を進めている。当面、人口については横ばいしていくという状況である。コンパクトな市ではあるので、今後、開発できる地域は少ないが、まずは、鷺沼の区画整理とJR津田沼駅などを中心に、まち全体の活性化や人口に対する対応を進めている。一方、少子高齢化も進んでおり、今後は人口増減のみならず、世代構成という部分を見ていかないといけない。今後、高齢者が増えてくるため、子育て世代の転入人数を増やしていく。習志野市は、市内に今3つ大学があり、その縁があって来ている20代の若者もいるため、その若者たちの転出を防ぐ、もしくは子育て世代になってまた習志野市に戻ってくるというような形のアプローチも必要であると今進めている。また、習志野市に所在する小中学校において、地域ごとに学校の規模が違う。JR沿線近くにある谷津小学校など1,000人以上の大きな学校がある一方で、袖ヶ浦団地周辺の地域では、高齢化が進み、そこにある小中学校においては各学年1クラス2クラスというような状況であり、習志野市内の小中学校においても学校のクラス規模で、非常に差が出ている。全体の人口構成も含め、地域ごとにおいても、活性化や街づくりという部分は進めていかなければいけないという状況である。当面人口は減らない状況ではあるの

で、引き続き、コンパクトなまちということを生かして、それぞれ地域の活性化を図っていこうと取り組んでいる。

【座長】

欠席委員の報告を事務局より代読していただく。

【事務局】

習志野市の学校数は、昭和 61 年に開校した谷津南小学校を加え、小学校 16 校、中学校 7 校となり、以後 30 年以上変化なく現在に至っている。近年は開発の影響もあり、児童・生徒数は微増の傾向にあったが、小学生は令和 5 年度から、中学生は令和 10 年頃から減少していくことが推計されている。このことから、令和 2 年度に適正規模適正配置の基本方針を定め、学校運営上の課題が想定された場合、学校・行政・保護者・地域等の代表で、今後の街づくりの中に学校をどのように位置づけていくのか検討する会議を設置することとなった。現在は、適正規模に満たない学校が生じて、街づくりの視点を持ち、学校施設や敷地の有効活用を進め、地域コミュニティの核となっている現在の学校（小学校 16 校、中学校 7 校）を可能な限り維持していく方針となっている。

【委員】

八千代市の街づくり計画、地域活性化に向けた対策ということで説明する。八千代市は、昭和 42 年に市制が施行され、首都圏のベッドタウンとして、京成本線と 1996 年に開通した東葉高速鉄道の沿線を中心に宅地の造成が進み、9 月末時点では人口 20 万 5400 人となっている。国全体では人口減少が進んでいるが、八千代市は依然として人口が増加しており、今年 3 月に改訂した人口ビジョンでは、人口のピークを 2029 年で約 21 万人と見込んでいる。今後も新たな住宅開発が見込まれている東葉高速鉄道の沿線でその傾向が見られ、特に大規模開発が今も進んでいる緑が丘西地区や大規模なマンション建設が予定されている村上南地区などで人口増加が見られる推計となっている。その上で、将来の人口減少が少しでも抑制され、都市の活力を維持していくためには、人口の自然減と社会減、それぞれの改善を施策として講じていくことを目指している。具体的には、自然減抑制策として、それぞれの世代の結婚出産子育ての希望を叶える、子ども・子育てに関する施策を充実させ、合計特殊出生率を向上させる。また、社会増の継続策としては、シティプロモーションの強化による市の魅力の創造発信、安定した雇用の創出、時代に見合った環境整備などの施策で、人口減少を最小限に抑制することを目指している。課題は様々あるが、今後も持続的な発展を遂げていくため、現在は令和 10 年度を目標年次とした第 5 次総合計画に基づき、街づくりを推進している。教育関係として、義務教育に関する施策については、小中学校の規模適正化や適正配置、老朽化が進んだ学校施設の改修整備、ESD の推進などに取り組んでいるが、このうちの小中学校の規模適正化や適正配置については、西八千代地区小中学校の児童生徒急増への対応を始め、少子化の進行や新たな住宅開発等に伴う取組をこの後教育委員会から詳しく説明する。また、高校・大学教育に関する施策では、大学・高校との連携を深めつつ、公開講座等による地域交流の拡大促進に取り組んでいる。産業振興、地域経済の活性化に関する施策においては、産学官連携を通じた産業基盤の強化などに取り組む中、協議会の委員に本市の地域代表として商工会議所の会頭が参加されているが、商工会議所と八千代市が協力して、産学官並びに関係機関との幅広い連携を目的に、八千代産学官協同ネットワークを設立し、市内中小企業と大学のマッチングなど、様々な活動を行っている。この事業は、大学だけでなく、県立高校にも参加いただいている。一例として挙げると、県立八千代高校の生徒と八千代市内のパン屋さんが、オリジナルのパン「やちパン」を開発し、各店舗で販売する「やちパンプロジェクト」というコラボ企画なども行っている。その他、各分野で展開する施策と合わせ、街づくりの着実な推進に努めている。冒頭で述べたように、人口減少や、多様化する市民ニーズの対応などもあるが、社会保障費の増加や大規模災害に対する安全安心の強化、老朽化が進んでいる公共施設の更新・再編問題など多くの課題も存在しており、こうした現状を踏まえると市民サービスの

充実を図りつつも、健全な財政運営や持続可能な行政運営への配慮というものも必要という認識を持って、長期的な視点で街づくりを進めてまいりたいと考えている。

【委員】

小中学校の将来計画ということで説明させていただく。まず本市の学校児童生徒数は、大規模集合住宅や戸建て住宅等の開発が急速に進む地域では増加傾向にある。一方で先行して市街化した地域等では横ばい、または減少の傾向となっている。そこで本市の教育委員会では、全市的な視点に立つ学校の適正配置について、八千代市学校適正配置検討委員会を設置し、また教育委員会の諮問機関として、八千代市通学区域審議会を設置して、これまで検討を進めて対応している。そうした中で、近年の本市の学校にかかる動きを2点申し上げると、まず1点目に、本市北東部に設置する阿蘇米本地域について、地域にあった3つの小学校が基準の適正規模を下回り、学校によっては複式学級とならざるを得ないような状況が生まれた。そこで本市では令和3年3月、児童生徒の豊かな教育環境を確保する、そして充実させることを第一に考え、当該地域の各校の保護者代表の皆様からの強い要望も受ける形で、3つの小学校を統合するとともに、地域の子供たちが入学する1つの中学校を合わせ、義務教育学校を新設する決定をした。そして令和4年4月義務教育学校「阿蘇米本学園」の開校に至ったところである。次に2点目として、本市北西部に位置する高津・緑が丘地域における西八千代地区について、こちらの地区は、児童生徒数の急増が見込まれている。東葉高速鉄道八千代緑が丘駅を中心とした地域の子供が通学する小学校は、みどりが丘小学校、新木戸小学校、通学する中学校は高津中学校と睦中学校だが、これらの学校が保有する現在の教室数では、今後の児童生徒数の増加に伴う学級増に対応できないことがはっきりしている。そこで本市はこの問題に対応するため、令和4年5月、副市長を長とした全庁横断的な組織となる西八千代地区小中学校等対策検討委員会を立ち上げ、地区の小学校と中学校の対策について、学校新設、学校増築、学区変更、既存施設活用、またそれらを組み合わせる形も含めて、様々な検討を進めている。その結果、令和4年10月、まずは先にピークがやってくる児童数の増加への対応策として、みどりが丘小学校の分離の新設校を形成することを決定した。また小学校に遅れてピークがやってくる中学校の対応策については、本年度中に何らかの方針、また方向性が定まるように取り急ぎ検討を続けているところである。そしてこちらの検討の具体計画としても、小学校対応と同様に、新たな土地の取得または当該地区の県立等を含む既存施設を活用する形での中学校新設を第一に考えつつ、あらゆる方策を否定することなく、現在検討を進めている。

【委員】

今後の街づくり計画、地域活性化の方策ということで説明させていただく。都市計画を所管する部署にいたるため主にハード的な観点から話をする。船橋市では、令和4年11月に船橋市都市計画マスタープランを策定し、「交流により発展し便利で住みよいまちづくり」、「誰もが安全・安心・快適に暮らせるまちづくり」、「自然と人と産業が調和したまちづくり」を目標に掲げ、船橋の将来都市像である、「人もまちも輝く笑顔あふれる船橋」の実現に向け様々な方針を定めている。例えば、土地利用の方針として、市内には9路線35駅があり、駅を中心としたまちづくりがなされている。その立地条件や希望に応じ、商業を集積する拠点や地域住民の日常生活を支える拠点などの位置づけを行い、拠点にふさわしい土地利用を誘導している。一方、市北部を中心とする市街化調整区域では、調整区域として市街化を抑制し、緑地などの自然や農地などを保全しつつ、条件に合致する場合には計画的な整備を行い、双方の土地利用が調和したまちづくりを図っている。また、この都市計画マスタープランに基づいて新たな街づくりが行われている。例としては、市南部のJR南船橋駅周辺では、駅前の市有地を活用した臨海部の拠点にふさわしい整備を行っており、来月下旬には商業施設「ららテラス TOKYO-BAY」がオープンする予定である。本市の中央部に位置する海老川上流地区においては、ふなばしメディカルタウン構想に基づき、医療サービスの充実と健康に寄与する街づくりの実現に向けて、医療センター移転や新駅誘

致を核とした土地区画整理事業と地区計画等による新たな街づくりを進めている。他にもいくつかの大規模開発が進んでいるような状況である。また市北部の地域では、都心方面と成田空港を結ぶ高規格道路である北千葉道路の建設も予定されており、インターチェンジが設置されることから新たな産業発展も期待されている。地域活性化については、地方創生に向けた目標や取組を定めた計画として、第2期船橋市まち・ひと・しごと創生総合戦略というものを策定している。この中には、「働きたい「しごと」があるまち・船橋」、「行ってみたい魅力があふれるまち・船橋」、「結婚・出産・子育ての希望がかなうまち・船橋」、「いつまでも住み続けたい安全・安心なまち・船橋」、の4つを掲げ、幅広く様々な部署で個別の取組を行っているような状況である。本市においては令和15年ごろまでは、人口が増加する見込みであるものの、地域によっては高齢化や人口減少となるなど、人口動態に地域差があるような状態となっている。このような状況下においても、市民の定住希望に応え、いつまでも住み続けたい、住んでよかったと思ってもらうために、地域の活力維持向上を図るまちづくりを推進している。いくつか政策をあげると、商店街を活性化するイベント等の支援、農水産物のブランド化の促進、地域資源を生かした観光プロモーションの推進、子供たちの体験・交流活動の推進、市民活動を体感できるイベントの開催や支援などの施策を掲げている。

【委員】

船橋の小中学校の将来計画についてということで話をさせていただく。本市においては、昭和40年代、50年代に人口が急増し、それに合わせて多くの学校が開校し、児童生徒数については昭和50年代の後半から60年代の初めにピークを迎えた。その後一旦児童生徒数については減少したが、小学校は平成12年、中学校は平成18年を境に再び増加に転じ、小学校は平成30年、中学校では令和4年をピークに再度減少に転じて現在に至っている。今後、全体の児童生徒数は減少していく見込みではあるが、市内全域が一律に減少するのではなく、北部地域、中部地域および東部地域においては減少していく見込みだが、南部や西部地域についてはマンションや住宅の建設が進むなど、今後の開発が見込まれることから、おおむね横ばいで推移していく見込みと考えている。近年においては、今年3月に中部地区にあった中学校が平成26年から1学級が続き、さらに減少が見込まれたことから近隣の中学校との統合を行う一方で、西部地区においては、児童数の増加から、新たな小学校が令和3年に開校するといったような状況となっている。このように児童生徒数の増減に地域差があることで学校規模に偏りが生じ、市内に大規模校と小規模校など規模の異なる学校が併存しているというのが現状である。令和11年度までの児童生徒推計では、統廃合を行うまでの児童生徒数が減少する学校はないが、学校全体で31学級を超える学校が引き続き存在することが予想されている。今後も、将来的な児童生徒数の推移を注視しながら、学校規模などの適正化を図っていきたいと考えている。

【座長】

ただいま、各市の担当部局及び各教育委員会から選出された委員の方々から説明をいただいた。質問があれば、願います。

(質問なし)

整理すると、小中学校というのは、それぞれの地域の街づくりにとって欠かせないポイントである。例えば、そこに住み続けるといえるときに、大事なポイントとなる。ただ、高等学校と比べた場合、基本的には小中学校は選べないため、地域との一体性がある。高校は、地域性が小中学校に比べると今まで薄かったのではないかと。高校生は電車移動もしているわけで行動範囲が広い。受験生の方が選択できる立場にいるため、インセンティブのようなものを持たせなければいけない。そういう何か課題のようなものが、報告の中から見えてきた。

これより意見交換の時間とする。大きなテーマとしては「習志野・八千代・船橋地区に所在する県立高校の適正規模・適正配置について」となっているが、会議次第によると、細かく2点に分かれている。

それに従って進めるということによろしいか。

(異議なし)

事務局いかがか。

【事務局】

承知した。1点目は、県が示した適正規模の考え方も踏まえつつ、この地区の子どもたちにとって望まれる県立高校の規模や配置について意見を願います。

【座長】

適正規模・適正配置という話があったが、やはり今の市町村の話よりも、一回り大きな規模で考えなければいけない。先ほどスライドに示していた地図が参考になる。見通しとしては、少子化があるため、生徒数が増えることはない。むしろ確実に減っていく。その中で、現時点で充足していない学校というのがかなり出てきている。スライドの地図と照らし合わせてみると、明らかに地理的な特徴がある。やはり地域の奥の方、地図で言うとこの地区の北側の、どちらかという交通の便の悪い方に作られて、割と偏って新設された高等学校というような印象はある。現状、先ほど報告いただいたことも含めて今の充足がなかなかうまくいかないということと、普通科が多いということが報告としてあった。この地域の高等学校のあり方について何か意見はあるか。

【委員】

この地区だけというわけではないが、定員が埋まらないと職員の士気が下がってしまう。それから、生徒も定員が埋まらないところで入学してくるため、子供たちの自己肯定感にも影響してくるのではないか。4～5クラス規模の学校に勤務したこともあるが、子供たちにとって大事な体験活動、部活動、学校行事、これがなかなか活性化しない。大きな学校だと、子供たちはいろいろな部活の中から自分の好きなものを選ぶことができる。そういう指導をする教員も豊富にいる。ところが小規模な学校になると、やりたくてもできないという子供たちが多くいるのではないか。さらに、最近の傾向として、転学をする生徒が非常に増えている。普通高校でも子供たちの転学への抵抗感が、親も含めて非常に薄くなってきている。高校に行けなくても、大学に行けばいいとなっている。それからなかなか小規模の学校で特色を出すというときに、単位数に縛られてしまう。学校独自の単位はなかなか認めづらいところがあるのが現実である。夢みたいなことだが、例えば午前中で授業が終わって、後は地域の学校で集まって部活をやったりとかそういったことができれば、子供たちの活動の幅も広がったりするのではないかと考えている。

【座長】

部活動も生徒数が急に増えることはないため、特別活動や学校行事も含めて、他校とか、他の学校種とのジョイントというのは考えやすい。

【委員】

学校が離れているため、なかなか集まるのが難しかったりするが、基本的には地域でチームを作って、月に何回かはできると思う。

【委員】

地域の北側の方の学校は交通の便が悪いということもあって、定員が満たされていない。そのことについて、先ほど各市から報告があった小中学校の部分においては、座長がおっしゃった通り、そこに住むということがあって、その住んでいる住宅の数等々その地域の特性によって、各小中学校の数も変わってくるということが要因の一つだと思う。高校に関しては、何か分析がされているのか。

【事務局】

スライドの中で、赤枠で囲った定員未充足の学校が7校あったが、全てこの地図の北側に所在している。これらの学校を創立した時期についてだが、地図の左から順に申し上げると、船橋法典が昭和56

年、船橋二和が昭和 54 年、船橋古和釜が昭和 55 年、八千代西が昭和 55 年、船橋北が昭和 60 年、船橋豊富が昭和 58 年、八千代東が昭和 52 年である。地図の南側にある赤枠以外の学校の中でも、船橋芝山、津田沼、実籾の 3 校が昭和 50 年代に作られている。第 1 回で説明したが、日本全体の流れの中で、学校数がピークであったのが昭和 63 年である。高等学校数が 5,512 校で、生徒数のピークはその翌年、平成元年で 564 万人。そこに至るまでの 10 年間、いろいろな場所で、学校が急増されてきた時期であった。改めてこの赤枠の学校の配置を見てみると、やはり非常にまとまった時期に作ったものであるため、いずれ 30 年後に人口が減ってきた場合、この学校がどうなるのかという視点というのは、なかなか持ちにくかった場所に作られている。交通の便も悪く、駅から遠い学校がちらほら見て取れる。また、高校生にどうしてその学校を選んだのかという質問をすると、一番先に挙げられるのが、「通学しやすいかどうか」である。その後、学校の雰囲気や部活動、そして学びが適切だったかといったような順番である。その点からすると、通学の便が悪いというところは、この地図を見て改めて思ったが、要因として高い順位に上がってくる。

【座長】

学習塾が公表している、いわゆる「偏差値」という指標で見ると、これらの学校は全て中の下から下にかけて分布しているという印象もあるが、そのあたりはどうか。

【事務局】

県立高校の問題だけではなく、教育をより良いサービスとして受けとめるならば、何を指標として選択するのかといったところがまず大きな問題としてある。中学校での進路指導においては、「行きたいところに行きなさい」というのが、おそらく今のスタンダードな指導の流れであると推測されるが、多くの生徒は塾に通っており、塾で提供される偏差値の表を見て、まず学力的にどうなのかといったところから現実的に考えるのではないか。実際この赤枠で囲まれたところというと、偏差値的な並びで見ると、座長が言った通りの位置づけになる。そうすると、偏差値が低いから行きたくないということではなく、我々が目指している教育というのは、今後子供が減っている中で、自分が学びたいことが実現できるところ。そのための多様性を学校に持たせたいと考えている。ただ、今その時期に立って、学校急増期のときに作れば人が入ったものが、現在は結果的に偏差値という指標で下位の部分に位置しているという状態になってしまっており、さらに人が増えないという悪循環になっていると受け止めている。

【委員】

今聞いた部分に関して個人の意見として申し上げると、南側の高校等はそれこそ倍率も高く定数以上の申し込みがあるという状況の中で、県立高校全体で適正規模という意味で、募集定員の定数を少し人気の学校は下げて、その分人気のないところ、交通の便が悪いところで調整する。その募集の段階で例えば各学級数を近隣で調整して合わせていく。そういった意味で学びについては均等だということであれば、調整というのを検討しても良いのではないかと思ひ質問した。

【事務局】

補足をすると、県全体の県立高校の次年度各学級数を何クラスに展開するのかについては、事前に県内で公立と私立の話し合いがある。大体毎年中学生の卒業生はこのぐらいだから、私立ではこのぐらい受け入れ、公立ではこのぐらい受け入れようという話し合いが 7 月に持たれて、それを受けて 8 月に各県立高校の募集定員が決まる。上手くばらけるように見込みを立てているが、蓋を開けると定員割れをしてしまう学校と倍率が 2 倍近くになる学校が出てしまう状況がある。先ほど偏差値の話があったが、そういう意味では入りやすい学校と入りにくい学校が出てきている。例えば倍率が 2 倍になっている学校のクラス数を減らして、もっと他の学校に分散させるべきではないかという考え方もできるが、多くの中学生が希望をしている学校の募集定員を減らすという考え方は、県民のニーズに答えていないのではないかという示唆もあり、行政として判断がなかなか難しいところである。大元をたどると公私立間

における定員の調整から始まっており、本来であれば適正な配分のはずだが、結果としてなかなかそうはなっていない。例えば私立学校には学則定員が定められているが、それを超過して生徒が入学している学校も都市部には多数あり、公私間の話し合いにおいて議論となっている。ちなみに私立学校の募集定員超過を合計すると約 1900 人である。

【座長】

高等学校は特色を持って競い合わせず、高校だったらどこでもいいでしょうというようなところがあったと思う。結果どうなるかという千葉から流出する一番のケースは、東京に行くという可能性が多い。それこそ交通の便が悪い地域でも、東京都内の方が近かったりすることもある。

【委員】

第1回でいただいた基礎資料の中にあつたが、第2学区から第1学区や第3学区への流出が多い。確定的なことは言えないが、1つの要素としては、第2学区は普通科が多いため、特色がある学校に流れているのではないかと。また、交通の便も理由としてあるだろう。その辺りのウィークポイントを改善することで、当初予定していた統合はしなくても済む可能性もあるのではないかと。前回の議論の中で、スクラップアンドビルドではないが、様々なニーズを捉えて、いろいろなコースを作って、いろいろ試してみればいいという意見もあったので、こういう何も特色のないところにそういったコースを作ること、生徒を集めるという考え方もあるのではないかと。

【委員】

適正規模・適正配置について質問させていただきたい。千葉県は都市部が6から8学級、郡部が4から8学級と、規模の考え方を分けている理由は何か。

【事務局】

郡部においては、学校が広範囲に点在している状況であり、人口減少のスピードも都市部より早いということがあつた。そういった人口の減少のスピードや人口のあり方が都市部とは違うという状況がある。

【委員】

義務教育では、高校とは違って、地域に学校があるということもあり、適正規模の考え方については、子供たちの教育活動をより豊かなものにしたり、より良くなるものにしたりするためにはどれぐらいの規模が適正かというような数字の出し方をしている。そのようなことを考えたときに、今現在定まっているこの適正規模が、仮に都市部であれば6から8学級としているが、船橋地区にその数字を当てはめていくことが本当にいいことなのか。本日の資料の中にもある赤い色がついている学校が、今度は違う見え方をする可能性もあるので、高校も義務教育のような視点で考えてみるのもいいのではないかと。大きい学校で子供たちの求める教育を進めたり、親も魅力を感じたりするような学校づくりをするというのは、一般的に難しい面もある。逆に小さすぎるというのもまた別の問題があり、本市で言えば、複式学級になるような小学校は子供たちのことを最優先に考えればやはり統合するしかない。高校における統合も、そのことについては反対もないし、必要があるならばそうするしかないであろう。本市においては、1学年で女の子が1クラスしかなくて、1人しかいないというようなことも生じていたので、子供のことを考えれば、ぜひ統合してほしいというような話もあがってきたという次第だ。

【座長】

例えば4クラスでも、何か魅力的な学校であればそれが適正と考えてもいいということか。実際に8クラス規模の学校が多いが、8クラスは多すぎるという見方もできる。8クラスだと3年間かかっても友達にならない人が圧倒的に多い。「大きい」イコール「魅力」だということはない。人気トップ進学校みたいなどの倍率は自然と上がってくるだろうと思うが、今回は、中堅の学校の特色について考えたい。

【委員】

県立高校で一番人数の多い中央帯のところに関しては、(学校配置の) バランスが悪いというのは感じていた。その辺りが周辺の学区に流出する理由でもあるのではないか。ここの3市だけで見るとそう見えてしまう。そもそもこの周辺の学校選択可能なエリアで人口分布上、一番多い学力レベル帯の学校がどれだけあるのかという観点は考えたほうがよい。また先程、八千代市で人口が急増しているエリアに、県立の施設を活用するという選択肢もあるとのご発言があったが、その視点は大切である。あるエリアの中で中学校と高校が接続することで、学校を回すスタッフが確保できるという考え方もある。大規模な学校はあまり良くないというような話もあったが、小規模な学校というのは、子供たちにとってはいい学びがあるかもしれないが、先生方にとってみると学校運営が大変である。例えば1学年10学級の学校と、1学年3学級では配置される先生の数が違う。規模は違っても、入学式・卒業式・文化祭など学校の行事はどれも変わらない。少ない人数だとそれだけひとりひとりの先生方の負担が大きくなる。地域や生徒のニーズなどからの検討もあるだろうが、実際にその中で働かれる先生方できちんとやり切れるのか、そういったところのデザインも合わせて必要かと思う。

【委員】

確かに全体的には子供たちが減少しているが、地区によっては教室が足りないというところも出ている。北部では、小学校も中学校も人数が減ってきており、廃校になると心配される学校もあるが、南船橋駅付近の学校でも一時は廃校になるのではないかという話があった。ところが付近で大規模なマンションが建設されたことで、一時はいっぱいだという時期もあった。今はちょうど安定してきているという話ではある。そのような場所も実際にあるので、これからまたどんどん生徒が増えてくる地区も出てくるのではないか。また、ある中学生が10月11月頃、もう高校が決まっていると言っていて、スポーツでもやっているのかと聞いたら、スポーツもやってないと言っていた。その辺はどういう形で決まっていくのかお聞きしたい。

【委員】

私立学校ではある程度、事前相談などが12月以降行われるのだが、その成績基準自体は夏以降に公表している。その基準に到達してる中学生がおそらく、よほどのことをしない限り大丈夫だという気持ちから、そのラインをクリアしてるという意味でそういった話をしているのかもしれない。

【委員】

適正配置だが、うちにも高校生の子どもがおり、私も八千代市の出身だが、高校生時代は自転車通学が一般的だったし、今と比べるともう少し公共交通の路線バスが走っていたと記憶している。今はかなり路線バスも減っている中で、北部の駅からの路線バスがなくなかなり行きづらい。親の車による送迎か自転車しかないという状況では、なかなか通いづらい。北部エリアにある私立学校は、スクールバスの運行がされている。八千代市の中学校も義務教育学校になって広域になったため、スクールバスを運行することによって交通の確保をしている。やはり毎日通う場所なので、行きづらいというのは、選択の際にはかなり重要視される。バスがあった時代のままの考えで「学校に来てください」と言っても、1本逃したら次は2時間後にしかバスがないというような地区もあるので、そういうところを何か対策をすることによって、今後、募集定員とかもスクールバスを運行するという部分も検討材料になるのではないか。

【座長】

先日、大学の講義の中でモータリゼーションの話が出て、この30年間で一番変わったものはモータリゼーションであり、自家用車の普及の影響で鉄道バスが微弱になった。講義を受けていた学生は「地方は大変なんだと認識した」と受け止めていたようだが、実は首都圏でも同じことが当てはまるということに都会の学生はなかなか気づけないようだ。特に小中学生と違って高校生は移動距離が長く、1時間以上の通学は普通にあることなので、そういった事情の変化が大いに影響するのだろう。

【委員】

実際、北部地域には本数は少ないが、バス路線の廃止自体も発生していて採算が取れないということもある。一部の学校ではスクールバスもあるが、軽井沢でのスキーバスの事故によってクローズアップされたように、夜行バスの運転手などは非常に激務である。今後、貸切バスの法案が更に法律改定されて、バスの運行費も高くなる。スクールバスの運行というのは相当経済的に厳しく、ギリギリで運行している状況だ。だから、市や県の方で用意するとなったときには、財務負担をどうするかという問題が発生してくる。また、自転車については、経済的事情で1時間かけて自転車通学をする男子生徒もいるが、女子生徒の保護者としては心配なようだ。また、都市部では自転車通路が確保されていない道路も多く、安全面での問題もある。最寄り駅から自転車通学をすとしたときにも、駅前の駐輪スペースが通勤客分で一杯であり、そこを高校生用にさらに増設することが難しいというのが各駅で発生している。そのような課題がある中で、なかなか交通の問題がすっきりいかないというのが現状であり、北部地域の高校への通学手段が確保できないという話に繋がってくる。

【座長】

バス業界では2024年問題というものがあり、大型免許を持っている人は、特別の事情がない限り上限を超えて労働してはいけないという規則が、来年4月からは、特別な事情があっても上限を超えて労働してはいけない、と改正される。ブラックを規制するというので、おそらく全国でバス会社、いわゆる路線バスも観光バスも、運転手が絶対的に足りなくなるということで、業界が騒然としている。ということは、スクールバスも安易には考えにくくなる。路線バスも、その流れでいうと確保できなくなる可能性がある。例えば朝のラッシュ時だけ重点的に投入するといっても、採算が取れないからそんなに雇用するわけにはいかないということになる。おそらく、リタイアされたような方をどうにか雇用し直して運転していただいているのが現状ではないか。

【委員】

この春に子どもが高校に入学したところだ。受験の際に、この資料に載っている北部の学校にもバスに乗って見学に行ったことがあるが、帰りのバスがない。時間帯によっては帰りたいたいタイミングで帰れないことがあるというのは、とても不便なことだ。自転車通学も考えたが、雨の日のこともあり、結局北部にある学校は選択肢から外れた。交通の部分は学校選択においてとても大事である。コミュニティバスのような形で学校まで送迎してくれるようなものがあれば、また少し違う。路線バスの時間を待つというのは実際には大変である。スクールバスがあれば助かるのにと考えた。バスの運転手さんが足りないとなると、大型じゃなくても運転できるもので何とかうまくできないのか。習志野市では路線バスが廃止になったところを小さいコミュニティバスが走ったりしているが、そういった形でもうまい具合に、生徒を少しでも運べれば違うのではと思った。また、差別化というか、学校の規模という部分の話だと、幕張総合が非常に大人数で、部活も選び放題の状況である。規模の小さい学校に行ってしまうと、やりたかった部活動ができないということが起こってしまう。

【座長】

部活動もそうだが教科指導においても学校の規模に影響を受ける。小中学校と違い、高等学校の学びは本来、カリキュラムの柔軟性がある。例えば世界史はやるけど日本史の方を少し増やすというようなアレンジが効くので、特色としてそれを出すべきである。しかし、小規模校だとそれができなくなってしまい、カリキュラム編成がガチガチになってしまう。特に社会や理科などは配置された教員の専門性に制約されてしまう可能性がある。ただそこで例えば、カリキュラムをひとつの学校の中に閉じ込めずに、近隣の別の学校のカリキュラムを履修できるとか、大学の科目も履修できるとか、オンラインを活用するとか、最近はいろいろな可能性が出てきている。そういったところを考えてみたい。

ここから、後半ということで、適正規模に満たない県立高校の今後の在り方について、そしてこの地

区における魅力ある高校について、という論点で話を進めたい。この地区では、普通科など同じタイプの学校が多く近接しているようである。どのようにして特色や個性を生かした魅力ある学校にしていったらよいか、とくに適正規模に満たない高校や志願状況が厳しい高校についての意見を願います。

【委員】

前回、広域通信制高校の話題の中で出てきたが、そういった意味での魅力としては自由度が高いというところが魅力になる。これまでの学校の魅力というのは一つの校舎の中にみんなが集まってきて、集団生活をするというものであったが、現代社会においては価値観が多様化してきているため、子供たちがそれぞれ自由に選べるというようなことも魅力になる。

【委員】

魅力という言葉を改めてどう捉えるか。そこから始めなければいけない。もう何かあたかも全員にアピールするようなものかと思いがちだが、実際に魅力のポイントというのは、人それぞれである。交通の便の良さという魅力があれば、例えばブランディングされている県立高校の伝統であるとか、自分のおじいちゃんおばあちゃんが卒業した学校であるということも魅力の1つである。そういった魅力もあれば、例えば今回、提示されているような学科コース作りももちろんである。その中で、個人的に思っているのは、改めて県立高校の校舎をしっかりと整備した方がいいということ。普通、建物は10年ぐらい経つと、壁が駄目になってくる。どの学校もボロボロである。作ってそのままという形で、薄汚れた感じになっていてひびが入っていた。お邪魔させていただいた学校も階段の床の滑り止めが全部剥がれていて、コンクリートがむき出しになっていた。小学校も中学校も高校もそうである。その中で、わくわくするかというと、ちょっと厳しいのではないかと。仕掛けとか配置のところももちろんだが、そこに子供たちや先生方がもっと気持ちよく過ごせるように、施設の整備にお金をかけた方がいい。そこは最低限必要なことではないか。近年、塾が発表していたのが、学校選択の際に誰が主導するのかという調査において、1番は塾、2番は母親で、父親は関与していないという衝撃的なデータがあった。その中で、そのお母様が「この学校で子どもを学ばせたい」と思えるような理由の一番はエアコンとトイレであった。特にトイレに関しては本当にチェックが細かいと思う。男女関係なく、トイレの和式は論外と思うし、洋式便器、さらにオトヒメ機能付きとか、何か音声が出るとか、ありとあらゆる装備があつて当たり前となっている。そういったところでの施設設備、改めてゴージャスにする必要はないが、ここへは行きたくないというようなネガティブな気持ちは持たせないようにした方がよい。それは働く先生にとっても同じである。それから二つ目に関しては、正規の授業に手を加えるということとはとても大変ということである。前回も少しお話させていただいたが、計画を練ってこれで万全とまではなかなか難しく、また始めたことを途中でやめるという判断をするのも行政としては難しいだろう。正課の学科コースの設計や授業に関しては文部科学省の元で県や市がうまくやっけていけない苦しさもある。その中でわりと自由度を高くしてできるものに部活動がある。前回も話題にあがったが例えばサブカルチャー的なものを置くことは現状でも可能である。今は地域人材の活用という方向に向かっており、そのような特色ある部活動により、特別感を出せると良いのではないかと。子供たちも施設設備と部活動で学校の決定をするというようなデータもあるので、県立高校に関しても、部活動というところで魅力を出していてもよいのではないかと。

【委員】

前回の会議では、教育の中身についてのお話が多くあったのでハード面の議論にならなかったが、施設・設備の話で気になることがある。本市でも小中学校の老朽化が課題になっている。高等学校の再編を進める上でも、施設の建設年度がかなり近いものばかりなので、そのあたりのメンテナンスなり、そういった視点で、この先も健全な状態で維持できるのかということころは、何か計画を持っていたり、すでに計画的に進めたりしているのか。また、本市では教室不足を新たな施設で対応しようと検討してい

るところだが、例えば県立高校の施設がこれまでに別の形で転用されている例があるかどうか伺いたい。

【事務局】

施設の改修に関しては明確にお答えすることはできないが、教育委員会として、例えば先ほど出たトイレの改修に関しては、通常の計画を前倒して洋式化を進めるという方向に舵を切っている。中学生に学校が選ばれない理由は何か聞いてもらったことがあるが、学校に見学に行ったけど、やはりトイレが汚かったという答えであった。その思いについては、教育委員会で共有している。あとは施設の改修に関して、順次大規模改修も含めて進めているという状況である。

【座長】

最近、国庫を削られて、なかなか自治体が各自でやらなければいけない部分が多すぎている。学校のメンテナンスの優先順位が高くなるとよい。この大学も実は私が着任した頃にはまだ和式トイレばかりだったが、7、8年ぐらい前に一斉に洋式化し、そのあたりから受験生が増えたと感じている。

【事務局】

先ほどの委員からの質問の2点目だが、県立高校の統合による空き校舎を特別支援学校に転用している例はある。

【座長】

高校生に聞いたら色々なアイデアが出そうなどころではある。ここで、欠席された委員からの意見を事務局より伝えてもらう。

【事務局】

本日欠席の委員からの意見を紹介する。

時間・距離に無理なく通学できる範囲に高等学校が設置されていることが望ましい。生徒会や部活動等生徒が主体的に行う活動に制約が生まれない生徒数、学級規模が望ましいと考える。今後の在り方についてだが、その学校でしか学べない学科、コース等を設置し、施設を充実し、志願者増を目指す。その場合、複数校の統合についても検討する。

【事務局】

別の委員からの意見である。

昨年度の高校入試では、私立高校へ多くの生徒が進学し、生徒の公立高校離れが目立った。経済的な負担軽減や公立入試の一本化などが考えられる。また、ICT教育や情報教育に力を入れる私立への人気が高まっているのも事実である。子供たちの数も減少傾向にある中で、今すぐの統合は難しいにしても、近い将来、定員の見直しは必要だと思う。令和6年度入試については、私立高校が定員を減らすことが見込まれるため、公立高校にどのくらいの生徒が集まるのか予想が難しいところだが、私立高校へ進学する生徒の割合の変化にも気をつけ、適正規模・適正配置を考える必要があるように思う。

この地区における魅力ある高校については、高校の立地を生かした特色ある学校作り、例えば船橋豊富高校に農業に関連した食物調理やスマート農業を学べるコースの設置、また八千代西高校の周辺には企業も多く工業団地もあるので、起業家を育成するコースを設けるなど、地域の力を借りつつ、地域自体も活性化できるような高校があるとよい。もし統合をすることがあるなら、卒業生やその保護者、地域の方にとっては重大なことだと思う。母校がなくなってしまう悲しさや寂しさ、地域の活力が失われてしまうこともある。まずは卒業生やその保護者、地域に寄り添い、時間をかけて理解を得ることが大切である。

【座長】

先ほど学校の規模の話、8クラスは多いのかなと勝手に言ったが、私の専門の立場から補足として述べると、小中高とだんだん学年・年齢が上がっていくごとに視野が広がり行動範囲も拡大していくので、当然ながら知り合いではない人との触れ合いや関わりが出てくる。みんな仲良くという教育はとても大

事だが、実際大人の社会では、仲良くない人とどう関わっていくかということが、市民力として今特に必要である。バーチャルやグローバルな広がりがある中で、それが望まれているところで、高等学校にある程度の規模がないとそういうところもうまくいかないということがある。だから学級の良さもあるし、学年行事とか学校行事とか、あるいはそれらを横断したプロジェクトの良さもある。ただ一方で、生徒の持つ特性によっては、少人数の方が本人らしさを生き生きと発揮できる、むしろ大人数だと沈み込んでしまう、あるいは自分を出すことができない、せっかくの成長のチャンスを摘んでしまうという可能性もある。競争に勝ってこそというのは、勝った側の意見であって、その手前で苦しんでいる子供もたくさんいる。そうすると、少人数で寄り添いながら支え合って学んでいくということの良さというもの一方にある。そのような多様化がまさに起こっていると捉えていて、小中学校では割とそのあたりを考えられているのかなと思う。高等学校においても、規模を一律にということよりも、そのような柔軟な考え方で、少人数でも何かに特化した教育をすればいいのではないかというのは、私の見解としてある。また、学校行事についてはひとつの学校の中で閉じず、複数の学校合同で実施した方がよい。

【委員】

自分が学びたいことを受け止めていける高校にといった方向性で進めていければとの話があった。県教委の方がそのような考えを持ちながら、これからも、県立学校の整備をしてくださるということは、小中学生、またその保護者にとって、本当にありがたいことである。この地域について特に普通科が多いという現状もあるので、受け止められる多様性のある学校をどう作るかという話になるのだが、前回の議論で、例えばその職業に直結していくようなキャリアを意識したものだけでいいのかというような話もあった。そういう意味では過去から進めてきたような専門的な学科、またはそのコースを作っていくだけではないという視点は持っている必要がある。義務教育も同じだが、カリキュラムをどう作るかということは当然あると思う。そのカリキュラムを達成していく、指導していくのはやはり教員になるので、カリキュラムが整備されていても、教員がどのような指導を実際に行っていくのかということの方が重要ではないか。先生方が、どのように力を発揮できるのかということの視点をあわせて持ちながら、総合的な取組を進めていただくのがいいのかと思う。例えば、義務教育の学校も全く同じようなところがあって、義務教育学校を作ったから何かうまくいくなんてことはなく、その中でどんな学校にするのかという方向性を明らかにすると、そしてそれを達成するための教師がどうなのかということがやはり、合わせて大きな問題なのだと感じている。こんなことを言うと課題があるのかと思われてしまうが、本市に現在できている義務教育学校については大きな評価をいただいているところである。

【座長】

教員のなり手不足や働き方の問題については連日報道されている通りだが、ちょうど今は変わり目の時期で、この状態がいつまでも続くということはないと思う。また、公教育を失わせてはいけないということを考えると、学校の教員が一番コアになるところであり、何が何でも大事にしていかなければいけないと思っている。そのためには、教員自身が生き生きと働けるような環境整備や、教員の主体性が発揮できるようなソフトの面の整備が必要だろう。

【委員】

中学生の卒業後の進路について、受入体制は万全にしていきたい。例えば学力に応じた選択ができるような機会を失うことがないようにしていきたいということ。また、通学にかかる時間については、経済的に厳しい家庭もある中で交通費の負担ということもあるので、理想としては、市内全域に広く点在することが望ましいと考えている。バスについても、数が少ない中で高校がなくなると、利用者が減って、バスの廃止に拍車がかかるということもあるかと思う。地域経済であるとか、地元と与える影響というのは大きいので、そのあたりは考慮していただいて検討いただければと思う。

【座長】

貴重な意見等をいただき、感謝する。最後に全体を通して何か意見があればお願いします。

(質問なし)

その他、何か議題はあるか。

特に無いようなので、以上で、第3回習志野・八千代・船橋地区地域協議会の議事を終了する。

※後日いただいた意見

高等学校の魅力を考える際、特色あるカリキュラムや交通の便などに加え、入学した生徒が3年間過ごすこととなる学校施設の清潔感や快適性が進路選択を左右することが想定され、併せて、築年数に応じた適正な施設及び設備の維持・管理による安全性の確保も見逃すことが出来ない点と考える。

県立学校については、「千葉県公共施設等総合管理計画」などに基づいて、適切な対策が推進されているかと思うが、統合が予定されていない地域の学校であっても、施設の改修や更新が計画的に実施されることが前提となる。

そのようなファシリティマネジメントの視点と合わせて、生徒のニーズに応じた教育活動が保障されるよう、地域における高校のあり方を更に検討いただきたい。